

フリーエネルギーの発見(1)

渡辺 満（静岡県）

§0 はじめに

6年ほど前から、フリーエネルギーに関する実験を、かなり熱心に行っている。モーターのような機械的要素の伴うものは、技術的にも金銭的にも無理なので、もっぱら、コイルと回路に限定して、行っている。

この種の装置は、結果の確認がむずかしい。

入力エネルギーと出力エネルギーを測定して、両者を比較すればよいのだが、素人に毛の生えた程度の僕の技術では、どうやればよいのか、わからない。そこで思いついたのが、永久機関化する、というアイデアだ。それができれば、疑う余地はないし、説得力がある。

しかし、永久機関化は、なかなかむずかしい。

この先、一体何年かかるのか？ 正直言って、ちょっと疲れた。

そこで、ここで一端、一休みして、

これまでに得られた結果を、書面にまとめ、公表することにした。

今、頭にあるのは2つ、

1つは、3年ほど前に発見した磁石効果、これを、この後に続けて書く。

もう1つは、半年ほど前に、テスラコイルの模型を作って発見した、奇妙な現象。

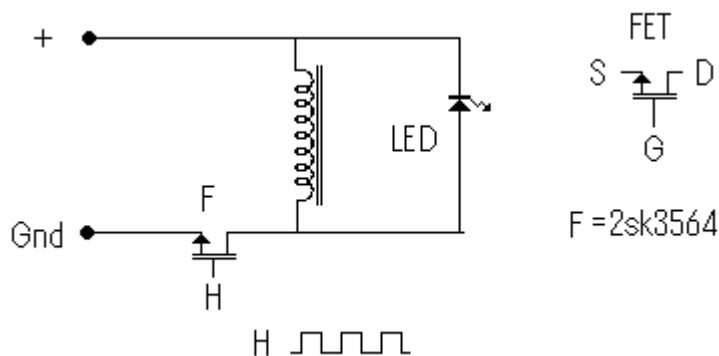
それを、この(1)に続けて、(2)の方に書こうと考えている。

§1 磁石効果

磁石とコイルを用いて、次のような実験を行った。

「コイルに磁石を近づけると、コイルの起電力が増大する、場合がある。」

磁石は、ネオジウム磁石 10mmΦ、長さ 30mm のもの 6 個を、
磁石の引き合う力で結合させ、長くして、長さ 180mm(10mmΦ)の棒磁石にした。
コイルは、フェライトコア(棒)10mmΦ、長さ 180mm へ、
太さ 0.32mm のポリウレタン銅線を数百回巻いた。



このコイルを、上図のような回路に組み込み、動かす。

H は、タイマーIC555で作った方形波で、可変抵抗器を回して、
周波数を変えることができる。(後述)

MOSFET はスイッチング速度が速く、高耐圧(900V)のもの(2sk3564)を用いた。
電源は直流 6V、LED は、12V 用。

この回路では、次のようなことが行われる。

H が High のとき、電源よりコイルに電流が流れ、

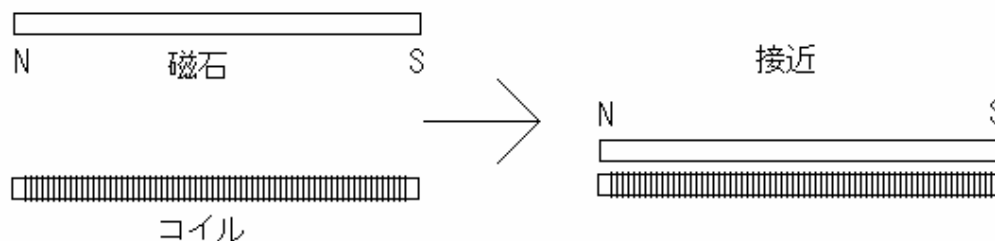
H が Low になると、電源よりの電流は切れる。

電流が切れたとき、コイルからパルス状の強い電流が発生して、
それが図の右側に流れ、LED を発光させる。

(H が Low になった瞬間、コイルに作られていた磁束が消えるが、
この磁束の変化によって、コイルには起電力が発生し、
それが、パルス状の強い電流を作り、コイルから LED に流れ込む。)

555 の周波数を変えると、コイルの起電力も変化し、LED の明るさも変わる。
周波数を、LED が最も明るくなるところに、合わせておく。

この場合では、約 1000Hz だった。



さて、こうしておいて、磁石をコイルに接近すると、おもしろいことに、LED の明るさが増す。同時に、コイルから出ている振動音も、大きくなる。(接触させなくても、近付けると、蚊の羽音のような音になる。) この現象は、歴然としているので、磁石を接近させることにより、コイルの起電力が増大したのは、間違いない。

では、「これは、フリーエネルギーなのか？」という問に対しては、「たぶん、そうだろう。」と憶測で答えるしかない。しっかりした確認が、できないからだ。

次のような、特徴がみられた。

- コイルの巻き数が 50 回ぐらいでは、逆に LED は暗くなる。(数百回必要である。)
- 結果には、接近させる磁石の向きが若干関係し、両者の磁束が同方向の方が、効果が大きいように見えた。(極性 N,S は、方位磁石で測った。)
- 効果が生じるためには、コイルのコア内で、磁石とコイルの磁束のせめぎ合いが、必要なように見える。

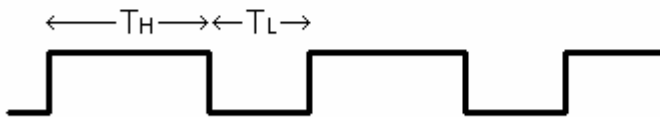
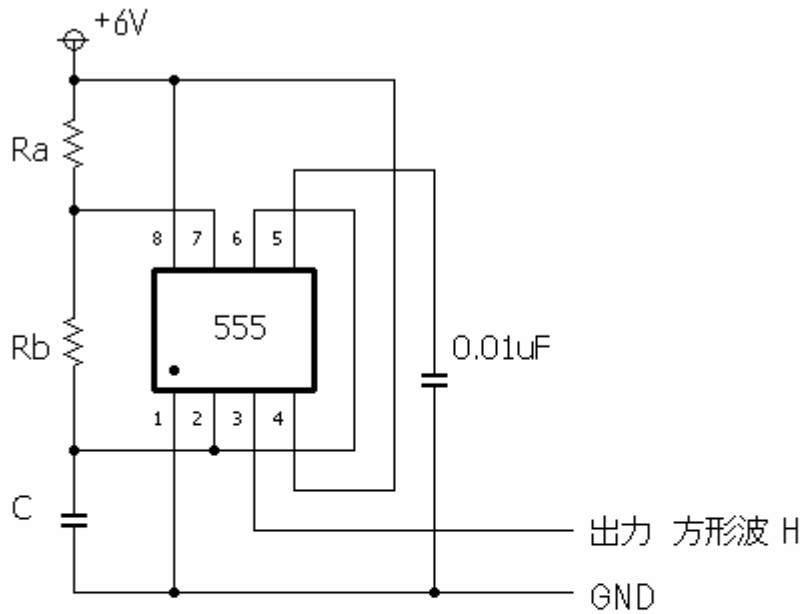
スイッチングレギュレーターの製品説明などを見ると、効率 85%などと、書かれたものがある。

あの効率は、どうやって測定しているのだろうか？

もし、スイッチングレギュレーターに、この効果を応用するならば、もっと、大きな効率が得られるのではないか。

100%以上も、可能かもしれない。

§2 タイマーIC555



$$T_H = 0.693 \cdot (R_a + R_b) \cdot C$$

$$T_L = 0.693 \cdot R_b \cdot C$$

$$\text{周波数 } f = 1.44 / (R_a + 2R_b) \cdot C$$

今回は、

$R_a = 1\text{k}\Omega$

$R_b = 100\text{k}\Omega$ 可変抵抗 (抵抗を大きくすると、周波数が小さくなる。)

$C = 0.01\ \mu\text{F}$

§3 磁石効果のメカニズム

次のような、腕相撲の試合を想像してみる。

AとBの2人の人が、腕相撲をしている。

2人の腕力に差がない間は、2つの腕は直立し、じっと静止したままである。

しかし、やがてBの力が、ほんの少しでも弱まると、バーン、途端に、バランスがくずれ、次の瞬間、Aの勝利が決する。

Aが磁石で、Bがコイルである。

コイルに電流が流れている間は、磁石とコイルの2つの磁場は大差なく、互いに相手の隙をうかがい、反発し合っている。

しかし、コイルの電流が切れると、途端に磁石の磁場が勝り、コイルの磁場を蹴散らし、コアに入って、その場を独占する。

この現象は、磁石の磁束の突っ込みにより、コイルの磁束の消えるのが、時間的に速くなるためではないか、と思う。

次節で述べる利得曲線が、実現しているのかもしれない。

今は、そう推測している。

§4 利得曲線

今後、必要になるかもしれない、利得曲線について述べておく。

これは、一般論である。コイルは、空芯でもコア入りでもよい。

電磁気学によれば、

コイルを通る磁束を Φ とするとき、コイルに生じる起電力 ϕ は、

$$\phi = -\frac{d\Phi}{dt}$$

である。

コイルに流れる電流 I は、この起電力 ϕ の作用で、エネルギーを得たり、

失ったりするが、その量は、単位時間当たり ϕI である。

$\phi I > 0$ のとき、電流 I はエネルギーを得る。

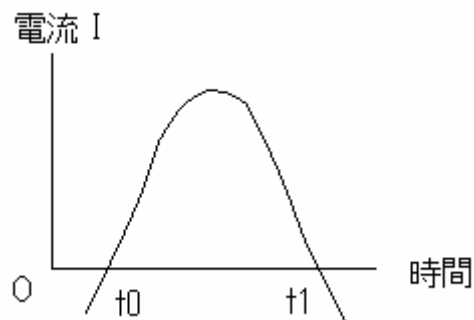
これから、時間 $t_0 \rightarrow t_1$ の間に、電流が得るエネルギー E は、

$$E = \int_{t_0}^{t_1} \phi I dt = -\int_{t_0}^{t_1} \frac{d\Phi}{dt} I dt = -\int_{t_0}^{t_1} \frac{d}{dt} (\Phi I) dt + \int_{t_0}^{t_1} \Phi \frac{dI}{dt} dt$$

書き直すと、

$$E = -[\Phi I]_{t_0}^{t_1} + \int_{t_0}^{t_1} \Phi dI$$

となる。



電流 I が、時刻 t_0 かつ t_1 で、0 であるとすれば、 $[\Phi I]_{t_0}^{t_1} = 0$ であるから、

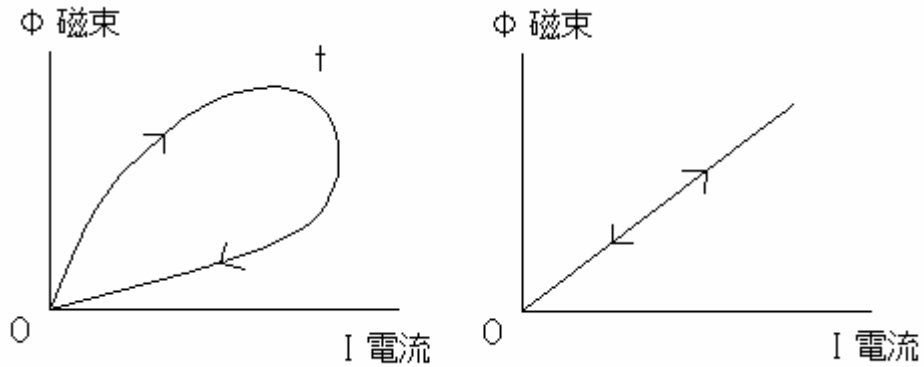
簡単に、

$$E = \int_{t_0}^{t_1} \Phi dI \quad \dots\dots \text{この式を用いる}$$

となる。

参考までに、これらの物理量の次元を記す。

磁束 $\Phi = m^2 k_g s^{-2} A^{-1}$ 、電流 $I = A$ 、エネルギー $E = m^2 k_g s^{-2}$



磁束 Φ と電流 I の関係が、上図左のようになるとき、これを利得曲線と呼ぶことにする。
 このとき、電流が得るエネルギー E は、正の値となり、これが、フリーエネルギーとなる。
 しかし、なかなか、こうはならないだろう。
 通常は、上図右のようになってしまう。

2016年9月発行 V1.0

著者: 渡辺 満, 発行者: 渡辺 満

Copyright 渡辺 満 2016年